続・家族理解入門

家族の構造理解・応用編

2018/3/15 版

私の連載、全体のマップ

「蟷螂の斧」と題した連載のここまでを整理しておいて、今後の連載を始めたい。先ず創刊号から開始したのは蟷螂の斧―社会システム変化への介入― part1　1990年児童相談所内外事情、これを12回続けた。その後、part2として「KISWEC家族療法訓練」のドキュメントを連載しようとした。これは既刊「「ヒトクセある心理臨床家の作り方」金剛出版の最終章、「家族療法」の続きのつもりだった。しかし開始早々に、いま書くことでもないかなぁと挫折した。そして「様々なシステムと私」と題して日誌をベースの文章を二回書いた。その後、「蟷螂の斧　第二部　トークライブ2001」を5回プラス番外編１回を掲載したところで、ずっと連載したいと思い、どんな形が良いかを思案していた「続/家族理解入門-家族の構造理解/応用編」（今回再開するもの）の連載を開始した。これは10年ほど前、季刊「そだちと臨床」誌に連載したものを、今の時代と既刊本「家族理解入門」につなげて校正しようとしたものだった。

しかし、これが自分でも意外だったが続かなかった。そして連載はまたトークライブ2001に戻って、6，7回と掲載した。この後、「蟷螂の斧　次の一歩　社会システムを変える」と題して、家族心理臨床を取り巻くより大きなシステムへの介入の試みについて6回連載した。

そして今回から、再び「続/家族理解入門-家族の構造理解/応用編」を第二回から開始する。私的にはこれらはすべて繋がった連載なのだが、読者にはひょっとするとバラバラに見えているかもしれない。

当たり前のことだが今、私が認識できる世界は、私を通じて私に自覚されている。私自身が今日社会を形成する一部である事実から、どこを切りとっても、現在というシステムの一面を語っているのは確かだ。そんな切り口の一つとして「家族の構造」に関心が向いて三〇年以上になった。

面白いものは「これ、面白いぞー！」と伝えるのが私の流儀である。そんなわけで、これからも、さざ波を立てながら、大きなうねりの時代の中、連載は続く。当面は今回再開する「続/家族理解入門-家族の構造理解/応用編」。ぜひ既刊本「家族理解入門」と併せ読んでいただければと思っている。

二　世代の溝

家族の境界と社会

「構造」とか「境界」などといったところで、当然の　　事ながら理解、説明用の仮説で、そのような実態

物があるわけではない。だからこういうことを思いつく人は偉いなぁと思う。「何の感想だ？」と怪訝に思う人もあるに違いないが、考えてみればいい。

雑多なアイデア、思いつきなら、凡人にもないわけではない。流行語と同じように、現れて、もて囃されて、あっという間に消えてゆく専門用語もたくさんある。そんな中で、時代を超えて長く生き残ってゆくキーワードに出会うとつくづく感心してしまう。

誰もが見ているものの中から見つけ出された法則が、それを知る（意識的に自覚する）ことで対象の理解や扱いが万人に容易になるなんて、ほんとうに凄いと思う。自然科学界における様々な法則の発見に等しい、そんな感じだ。

とくに家族などというそれ自体が、時代や社会形態と共に刻々変化する規定しにくいものについて、分かりやすい枠組みを明示するなど、並の技ではないと思った。

*

そこで第一回（本マガジン第22号47ページから。バックナンバーご参照ください。）に続いて「境界」について書くが、とくに内外の境界、このテーマで書くべき事が尽きないのはある意味、不幸なことである。なぜならば出身家族（原家族）と現在の自分の家族の「境界」線など、ことさら話題にならないのが一番だからだ。

そうはいっても、少子高齢化社会の現実を見れば、要介護状態で一人暮らしになった上世代に、下の世代が否応なく巻き込まれ、自分たちの生活に少なからぬ影響を受けている現実の存在は事実だ。何しろ一組の夫婦に四人の親の老後リスク対応が被ってくる可能性の状況である。さらに社会は経済的理由から、じわじわと自助努力、自己責任を迫ってきている。

そしてこれと背中合わせに、経済力のある上世代が子ども世代の分離独立に影を落としている場合もある。

*

ここに書いていることが、二〇一八年の日本社会と強くつながっていることは自覚しておく必要がある。

家族は普遍的なようで、実は非常に流動的だ。同じ時代にあっても、国によって民族によって、社会体制によって、その語られ方は大きく異なる。

今、近くで大きな特徴を抱えて見えるのは中国の家族の現在である。1980 年代、1990 年代と「一人っ子政策」をとってきた国の根幹人口政策が 2010 年代に変わった。しかしそう簡単に人々の意識や習慣が変わることはなく、子どもは増えない。

一方で、一人っ子で育った人達の『小皇帝』などと言われた側面ではなく、誰もが一人っ子であり、高齢化社会を迎えた中国において、膨大になった高齢者福祉にはなかなか手の及ばない現実は、社会体制も、市民生活も、大きく圧迫し始めている。

中国の三世代は、子育ての爺婆世代、賃金労働の両親世代の分業で時代を乗り越えてきた。ここでは日本社会で考える世代間境界のことなど問題にならない。今が経済的に上手くいくかどうかが、家族の大きな分かれ目である。

日本社会と類似の問題は当然存在するが、それを社会の課題として語るかどうかには、国情の違いが大きい。

だから私たちの社会が話題にしていることも、状況が変化するとコロッと変わってしまう類いのものである。あまり、ムキになって今の日本の言説や国民感情を持ち上げすぎると、ひどい目に遭うのは私たち自身だ。我々は自分の言っていることも含めて、もっと用心深く、懐疑的であらねばならない。

次男の忠誠

「忠誠心」というのは内外の境界を考える上で、目安にし易い概念の一つである。誰でもそうだろうが、人は少なからず出身家族の影響を受けて生きている。

具体的な拘束や反発から、心情的な不自由さ、自分でも受け容れたくないと思いながらも解放され

ない習慣など、注意して探せば誰にも多少は存在する。当然の事ながらそこには、ポジティヴなものとネガティヴなものが混在している。

ある家族の面接をしていた時のことだ。主訴は小学校六年生の娘の不登校。しかし面接のちょっとしたきっかけから、話題がドンドン拡がったのは父親の実家との関係だった。

父親は地方の名家と称する一家の出身で、三人兄妹の末子で、兄と姉がある。長子相続で兄が跡を取り、姉は豪華な花嫁支度をしてもらって嫁いだ。末っ子で次男の父親は、大学入学と共に地元を離れ、そのまま卒業、就職、結婚の道をたどった。

妻にしてみれば、ことさら夫の実家の世話になったわけでも、格別な支えをもらったわけでもないから、クールに関係を捉えていた。しかし夫は違った。大学まで出してもらったという意識は、妻のような都会のサラリーマン家庭育ちには理解しがたいことだった。それが実家の慶弔行事がきっかけで顕在化し始めた。

夫の母（父方祖母）の喜寿の祝いにみんなが集まると知らされた日程は、妻が仕事の関係で休暇を取るのが一番難しい年度末だった。しばらくもめた結果、夫だけが出席することになった。ところがそれに際して用意しようとした祝いの品の法外さに妻は絶句した。

「お祝いする気持ちは同じだから言いにくいのだけれど、世帯のことを考えたら、程度はわきまえてもらわないと・・・」

しかしこの点で夫は思いの外かたくなだった。結局、「ではご自由に！」ということになって、妻はあずかり知らぬ事となってしまった。夫婦の間にわだかまりは残った。妻には、私の両親にも同じようにしてくれるのか・・・という気持ちが生まれた。

しかしこれが前例となって、事態は更に発展した。最初の祝いで、実家の兄や姉、そして母からも、「大したものだ。さすが京都に長年暮らしている人のすることはあか抜けている」とか何とか言われて舞い上がったんでしょう、とは妻の言い草だが、確かにそういう傾向に拍車がかかった。

それ以降、お中元、お歳暮、母の誕生日にちょっとしたプレゼント（妻に言わせると貢ぎ物）をと、エスカレートしていった。

無理して購入した一戸建てのローンを抱えながらの親子四人の暮らしは慎ましやかなものだった。子ども達の学費など、今からお金はいくらでも要る。そんな中で夫が、家では誰も口にしたことがない京銘菓や漬け物を、季節ごとにせっせと送り届けている。そしてたまに帰省するとなったら、大騒ぎで手土産を用意する。反比例するように妻の足は遠のいていった。この不満が妻の口からあふれて、とどまることがなかった。

古典芸能や伝統産業などの世界には「家」や「血」を強調するものも少なくない。しかし現在、大抵のことがサラリーマン小市民社会に埋没した感がある。そんな中に、時々こういった忠誠心を求める関係と、それに応えたがる心情が潜んでいる。

もっとも、多くのくの場合、裏側にギヴ アンド テイクの暗黙の約束事が成立していたりするから分かりやすい。しかしこの一家のように、父親の行動のバランスの悪さに、家族一同の気持ちが引いてしまっている忠誠心も存在する。

こんな中で、娘の不登校問題への対応が求められていた。私は「でもまぁ、こうしてお嬢さんのために、面接にも同行しておられるのだから・・・」と父親の努力も評価しようとした。しかし、「この人は娘が不登校になっていることを、お兄さん夫婦やおばあちゃんに言うかどうかを悩んでいるのです。娘のことを父親として心配しているわけではありません」と母は言い放った。

利害の一致

結果としてではあるが、子どもの症状が親の支えになっている場合が少なくない。親の葛藤状況への反応として、子どもが症状を示したり、親のどちらかに取り込まれる形で安定装置の役割を果たしてしまうこともよくある。

時々話題になる『ミュンヒハウゼン症候群』（周囲の関心を引き寄せるために虚偽の話を

したり、自らの体を傷付けたり、病気を装ったりする症例）や、特に児童虐待の現場で話題になる『代理ミュンヒハウゼン症候群』（子どもを傷つけておいて、それを献身的に世話をする母として注目を惹く）など、親子の関係病理に目を向けると、これらもけっして希ではない。

離婚が多発する昨今、夫婦関係は簡単に崩れる。そして日本の現状では、多くの子どもは母親に引き取られて暮らすことになる。現実の生活を考えた選択だとは思う。ただ、この背景に世代間境界を引き損なった母子関係が隠されていたりすることもある。

内外であり世代間

夫婦それぞれの実家と現在の世帯間の問題は、内外の境界問題であると同時に世代間境界の話でもある。

親の側が子どもを手放せない。自立援助ができない。母子密着なんて言葉が一般的認識として蔓延しているのも事実である。

私の友人にも、嫁いだ娘の離婚希望を積極的に応援して、引き戻してしまったとしか思えない親子がある。いったいなぜ、こんなに多くの子ども達が親元から離れられなくなってしまっているのだろう。これが近年、わが国でますます大きな課題になっているものである。

実はここには大きく夫婦・カップルの問題が影響していると思うのだが、そのことは次章の「サブシステム」のところで述べる。

後出のマンガに描いたように、家族関係世界は、メンバーそれぞれが思いもかけない役割を果たしてきているものである。うっかりすると、稼ぎの多い人やしっかり者順に重要なメンバーであるかのごとく思ってしまうが、家族は会社や商店のように、利益を中心に整理されたような分かりやすい小集団ではない。

関係世界の複雑さは本当に不思議なことを作り出している。その一つの典型であるひきこもり現象を、思春期・青年期の個人の心性の問題として語ることに、私はあまり同意していない。

無論、特殊な状態を抱えることになる人があるのは承知している。病気の存在も否定するわけではない。滅多にないトラブルに巻き込まれる人がある事も承知している。

しかし承服しがたいのは、そんな人が大勢いると突然、私達の社会が簡単に認識してしまっていることだ。

「うちのクラスには、ＡＤＨＤとアスペルガー併せて少なくとも七人、軽度発達障害の子がいます」と興奮気味に語る教員の付和雷同性に、私はあきれてしまう。

多くの人間の行動は状況に支配されている。時代の動向や社会環境の変化、対応力によって、出現する問題が千差万別になるのは周知のことである。だから、同じ時代を生きていても、世界各地の人々の身の上に起きる事態は随分異なっている。グローバルに起きていることもあるが、ドメスティックに起きていることも多い。

パートナーは

ある新聞のコラムに「世代間境界」と題してこんな事を書いたことがある。

＊

親の世代と子どもの世代、ここには境界が引かれている。いや、引いておくべきだという方が良いかもしれない。これができずに起きた問題を見てみる。

父親は優秀な技術系のサラリーマン。妻も学生時代から続けている趣味を生かして、ちょっとした仕事を始めていた。とはいっても生計の担い手は夫で、基本的には専業主婦のスタイルだった。

大企業サラリーマンの夫に、転勤の話がもちあがった。小学校高学年と低学年の二人の息子と両親の核家族に転機が訪れた。

中高生になった子ども達の学校問題や、妻の就労が大きな比重を占める家庭の場合ならと

もかく、この一家の場合、常識的な決断は夫の転勤に伴う転居ではないかと思った。

しかし実際は違った結論が出された。夫が単身赴任することになったのだ。妻が自分のしていることを一時手放すことになってしまうのを躊躇したのである。子ども達は単純に、友達と別れることや、見知らぬ土地への引っ越しに消極的だっただけだ。

夫の中にも、家族がバラバラになる事への懸念と天秤にかけた、新しい土地で仕事一本に集中することで得られる充実感への思いがあったのだろう。そうすれば、２，３年でまた戻ってこれるかもしれない。

家族内では、そうもめることもなく、単身赴任が決まった。一時の単身赴任を命じたつもりはなかった会社の方が意外感を持ったかもしれない。しかしそれは個別の家族の選択であり、会社が口を挟むことではなかった。

そしてバタバタと月日が過ぎた。はじめは頻繁だった連絡も、何かあったときには･･･と間遠になっていった。近年ならメール、スカイプということになるのだろうが、当時、国際電話だけではなく、遠距離の通話料は著しく高かった。

しかし今なら頻繁にメールやネット電話の交換がされているだろうと云えるかどうか、そこに確信はない。コストの話は実は、言い訳でしかなかったのではないだろうか。

近くではなかったので、月一度くらいはと考えていた帰宅も、バカにならない交通費に、会社の出張があった時に合せてと、状況任せになっていった。

こんな中で母親は、家族の日々の細々したことを長男に相談するようになっていった。意識しているわけではなく、自然のなりゆきだった。しっかり者の長男は、いろいろ聞かされることで、それなりに母を支える役割を果たせるようになった。今では、家庭の細かい事情は、夫より長男との方がツーカーの関係になってしまっている。そんな中、弟の問題で来談することになった。

この場合、相談の中味がなんであるかより、兄が母親と一緒に弟のことを心配し、意見を言っているのが問題だった。兄も子どもであって保護者ではない。

これが世代間境界の侵犯である。母親が弟のことで、つい兄に相談を持ちかけてしまっている、これが家族の問題だ。だから父親を、単身赴任先から面談の場に来てもらう、これが解決に向けた第一歩になった。

おわりに

総合的判断はしばしば過つ。家族が課題を抱えた時、人はあれこれ総合的に考えて結論を出そうとするように思う。しかしこの考え方はたいして正しくない。

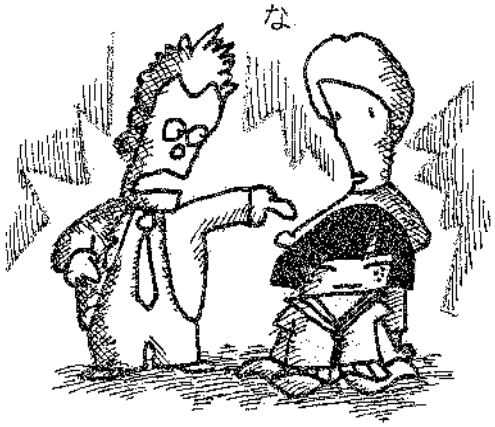
もし家族が事業や仕事であるなら、この判断は正しいだろう。不登校の子に、単位制高校への転校や、高卒認定（旧大検）予備校入学など、多額の金銭を費やすのは失格の事業主だろう。

しかし「家族」は、機能は果たしているが仕事ではない。目的に向けて一直線に進もうとする成果追求型の集団ではない。親はそうではなく居られるから親なのだ。親子関係、夫婦関係、嫁姑の関係などは、不合理さに充ちている。そしてだから強いとも言えると思う。

少々飛躍するかもしれないが、離婚が増えて呪縛から逃れた女性達が、必ずしも幸せなその後を手にしているとは言えない要因のひとつは、不合理さの扱い下手ではないだろうか。

家族生活のマネージメント目標は、何も問題のない状況をつくることでも、全勝することでもない。さまざまな課題を引き受けながら、トータルで五十一勝四十九敗の勝ち越しなら、先ずは良しと考えられる事である。

家族には
いろいろな
ことが
起こる



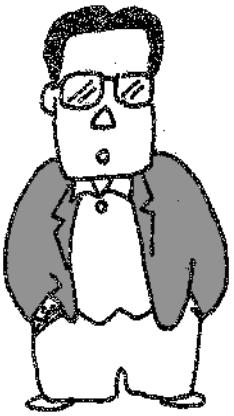
だがその多くは
予想のつかない
ことではない

利害の一致

in the shade of family tree

木陰の物語

既に起きてしまったことにも同じ
ことがいえる



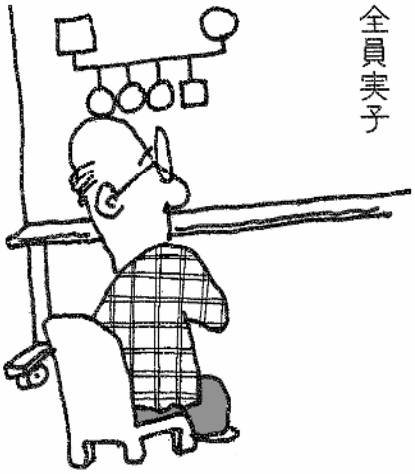
こんな家族に会ったことがある。
父親が３７歳、母親は３８歳、
子どもが四人いる

長女7歳、二女5歳、三女3歳、
長男2歳

少子化対策にあれこれ国の政策が
動き始めているこのご時世に4人
である

「三人続けて女の子か…、よほ
ど男の子がほしかったのだろう
か」、そう思った。
跡継ぎなんて
古めかしい言葉が
頭をよぎった

同僚と少し考えてみた。全員実子
なのだろうか?
もしそうなら、
三十歳を過ぎてから
四人生んだことになる。
これはずいぶん希な
選択のように思われる



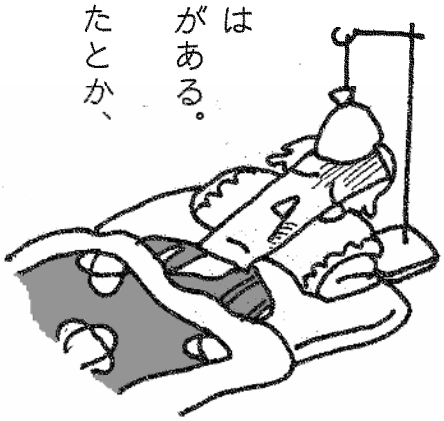
もし子連れの再婚だとしたら、
誰が誰の連れ子の可能性が
あるだろうか?

兄が引き継いだ
郷里の家業を、
弟にも
手伝って欲しいと
兄が求めている
という連絡が
両親からあった

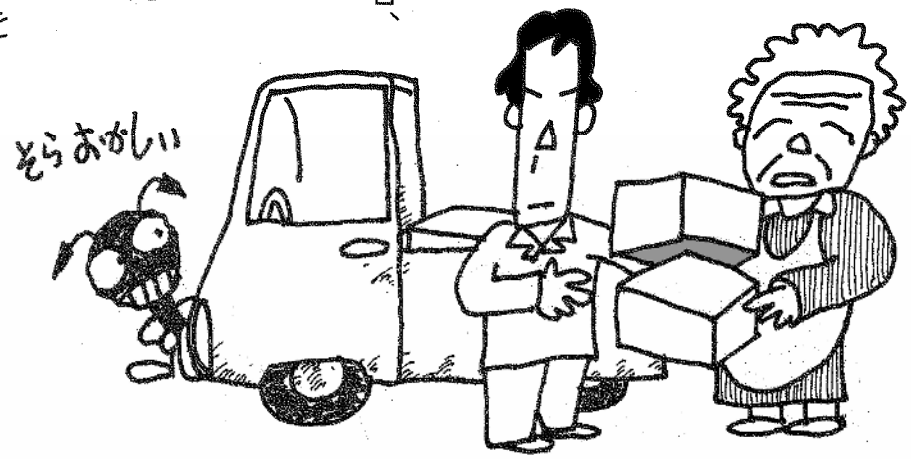
住むところも仕事も用意するか
ら、戻ってこないかという

夫の転職に妻の退職、
そして転居。
大きな決断だった

多くの場合、
こういう決断には
何か特別な理由がある。
たとえば両親の
どちらかが倒れたとか、
兄の病気とか



しかし彼らの場合、
そんな理由は
何もなかった。
おそらく両親が
次男も
引き戻したかった
のである。
兄は自分が説明に
使われていることを
知らなかった



そして夫婦は
夫の故郷に戻って
兄と共に
家業を
手伝うことに
なった

妻は専業主婦になり、それをきっ
かけに子どもを生んだ

今、この第一子が
学校に行けなくて
母親が悩んでいる。
まだ二年生である

七歳の子は生まれてすぐに
次々下ができて、
どんどんお姉ちゃんに
ならなければ
ならなかった

さらに四人目は
男の子。
一家の関心は
そこに集中した

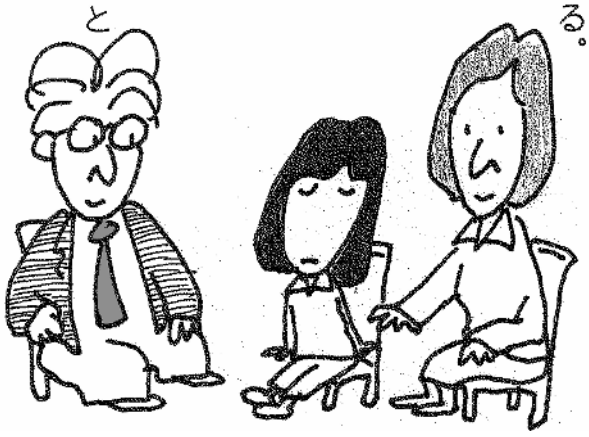
そんなタイミングで、学校にゆかねばならない長女が、赤ちゃん返りするようにぐずぐず言い始めた。分かりやすい話である

しかしすぐにその解釈に
飛びついてしまわないで、
別の角度から考えてみた

見知らぬ土地、夫の家族兄弟の暮らす地域で、母親の孤独感はどんなものだったろう。次々に子どもを産んだのは、絶対的な自分の味方がほしかったのではないのか

職住接近で何もかも一緒の毎日は、母には耐え難い日々だったかもしれない。子育て、家事に加えて、家業手伝いの重なるしんどさ。それを訴えることさえできない暮らし

こんな状況で長女の問題が起きた。それは母親に新たな負担を強いるかに見える

しかし、「子どものことで相談に・・・」と言えば、家業を置いて出かけることに反対する者はない

私のなかには、こんなかたちで母親孝行する子どもの記憶が少なからずある。誰も意識しているわけではないが、結果的にそうだった。母親は一日も早く何とかしてやりたいと願ったが、経験的にこういう相談はあまり早々と解決してあげない方が良かった